

「共苦」

世の中、「共」ばやりである。曰く「共生」、曰く「公共」、曰く「共同」……当然のことだが、この「共」は、自己に対する他者の存在、そしてそれとの関係性の成立を前提とする。しかし、我々は他者との関わりの成立について、明確な理解を有しているであろうか？

そんなことを考えていたとき、次の一文が目をつけた：

共に楽しむ共楽、共に学ぶ共学、共に育てる共育、…、何より僕は、共に笑う共笑（ともえ）が大切だと思う。今の世の中では、片方ばかりが笑っている。

（2015/11/30 朝日新聞朝刊「天声人語」より）

今（2016/06）から考えると、なるほど自分という片方だけ笑おうとする地方自治体の知事もいた。

「共楽」を採り上げよう。その否定概念は何だろうか。De Morgan's Law を持ち出すまでもなく、「少くとも1人、楽しまない人（苦しむ人）がいる」ことである。もちろんみんなが楽しい方が、楽しまない人がいるよりもいい。では、それでいいのか。「楽しまない」と「苦しむ」の違いは何か？

亀山郁夫というロシア文学者がいる。ドストエフスキー『カラマーゾフの兄弟』の翻訳を、光文社古典新訳文庫から出して、ドストエフスキーの翻訳物としては破格の読者を獲得した。

確かに訳が鮮明であり、筆者はこの訳書を手にとって以降、亀山ファンになった。

その著書に『ドストエフスキー 共苦する力』（東京外国語大学出版会、2009。ISBN: 9784904575017）がある。やはりドストエフスキーの代表作の一つ『悪霊』についての、根源的な洞察である。

「人間の傲慢さ」（それは、ドストエフスキーの全作品を貫くテーマである）に対して、作者は一つの答えを与えようとする。その反面教師が主人公スタブローギン（＝悪霊）であった。革命運動の指導者であったスタブローギンの犯す罪は、その異常な程高い能力をもって同志を「そそのかし」、その結果同志たちはスタブローギンの思想を理解・実践しようとして自壊していく中に見てとれる。それは、スタブローギン自身の自壊の過程でもあり、その特質は「そそのかし」、「使喚（しそう）」、「教唆」、「黙過」である。（スタブローギンの犯した罪自体、あるいは「具体的」罪深さについては、原著（の翻訳）『悪霊』を読みたい。やはり亀山氏の訳がある：『悪霊』光文社古典新訳文庫 全3＋1巻、2010。ISBN: 9784334752118/279/422/453。）

彼スタブローギンを使喚へと導くものは、一言で言えば「他者に対する、人間の生命そのものに対する、無関心」である。それは、「冷静に神の地位を篡奪するようなかたちで人間の命を奪っていく存在」であり、革命の同志たちは、スタブローギンの使喚により、殺し合い、あるいは自死により次々に命を落す。自分の手を汚さないことこそ、最大の罪なのだ。そこにあるのは、

* Group Epsilon 名誉顧問, Acta Epsilonica 主筆。

他者の生命, 他者の苦痛に対する感覚の麻痺である。

先ほど, スタブローギンを「反面教師」と呼んだ。では「反面」に対する「正面」は何か。その答えは明らかであろう。「共に楽しむ」だけでなく、「共に苦しむ」ことである。「そそのかし」の反対概念とは, 苦しみの一端を「引き受ける」ことではないか。それが「共苦」ではないだろうか。

(他者の) 苦しみが存在するその同じ地図上に我々の特権が存在する。

(スーザン・ソンドク『他者の苦痛へのまなざし』北條文緒 訳。みすず書房, 2003 (2011)。ISBN: 4622070472)

PS. この小さな column を書くに当たって, 亀山先生の上掲書に多くを負っています。この場を借りて, 先生に感謝したいと思います。「ドストエフスキー読み」を自認していた筆者のドストエフスキー観を, 先生作品は根底的に覆してくれました。

また, 本誌 *Acta Epsilonica* 各号の巻頭言として, このような欄を引き受けることになりました。編集委員の方々, 特に mirai san に感謝し, また執筆が大幅に遅れたことに対して, 深謝したいと思います。

kymst

次号 Vol. 1, No. 4 では, 次の KOTOBA — ΛΟΓΟΣ — 言葉を探り上げます:

“LORD, You said that once I decided to follow you, You would walk with me all the way. But I have noticed that during the most troublesome times of my life, there is only one set of footprints. I don't understand why when I needed You most You would leave me.”

The LORD replied, “My son, My precious child, I love you and I would never leave you. During your times of trial and suffering, when you see only one set of footprints, it was then that I carried you.”

(*FOOTPRINT IN THE SAND*. Author Unknown.)